

あそ

3

2018



葉牡丹の花芽

三月
や水
を
かけ
て
人

可
太
朗

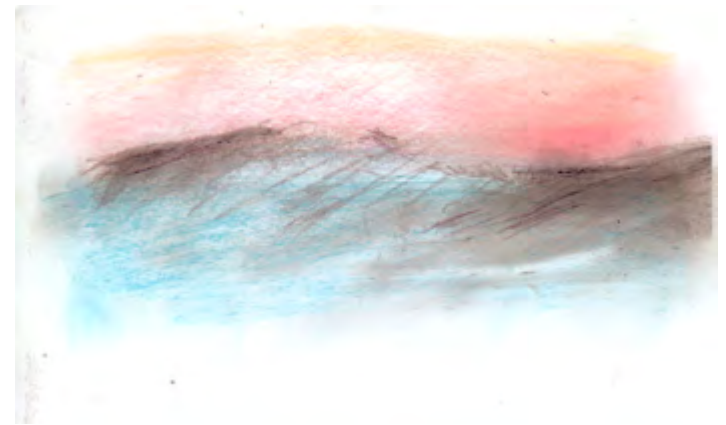


風
の
箒

本塩沢お召格子柄

あそ

三月



初昔

鶏頭のどこから出でし小判かな
まっすぐで迷路でありし初昔
新年やコトバは一度拭いてから
寒の水妻の言ひつけよく守り
一月や町の砂場の外の砂

東京

佐藤 喜孝

雪催

獅子舞の笛に光りて風の木々
寒に入るこんもりと足す砂糖壺
冬木の芽次つぎ挑む登り棒
地に伏して家びつしりと雪催
渋滞の只中よりの初電話

東京

森 なほ子



冬青空

埼玉

山莊 慶子

雅なる水鳥二羽や万歩計
数へ日の鷗と会ひしひと日なり
鴨の陣ひといき遅き一羽かな
花苗の命つなぎて青き空
冬青空滑り降りくるピエロかな

東京

赤座 典子

雑詠

寒木瓜や蕾に紅の点り初む
年玉の礼ぼそぼそと受験生
初電話互ひの日に恙無し
買初は己が着せたき幼の衣
初旅や杖忘れずに湯治宿

埼玉

秋川 泉

寒に入る

七キロの大根飾り道の駅
老猫も寒満月を見上げをり
夕あかり子らが抱きつく雪達磨
雪しづくはらり小犬が飛び跳ねる
雷鳥のふはりと降りて飛び立ちぬ

東京

石森 理和

水仙花

花好きの中でも一番水仙花
生きる場所突如替へられ水仙花
もともとは伊豆の道辺の水仙花
去年より三株殖えをり水仙花
庭先にうつむき咲けり水仙花



雑詠

埼玉

大日向幸江

七五三ねまえ紅葉も風に揺れ
カレー続き又今日もカレー枯葉色

千葉

黒澤 佳子

マスク

唇に触れるマスクや紅のあと
寒いとは言はず朝食準備する
ちゃんちゃんこハッカドロップ探し舐め
丸丸と出窓に猫や日向ぼこ
春風やペダル漕ぐ靴真新し

東京

七郎衛門吉保

三が日

初座敷床に鎮座の戌張子
初夢を話おかしく朝餉かな
四歳に付度なしのカルタとり
ただ静か鎮守の杜の初詣
テーブルに赤楽焼の初手前

東京

篠田 純子

新年

獅子に噛まれ火吹男にハグさるる
空っ風でてんパララはね太鼓
幼児のさす本将棋実千両
銀座露地もっさりとした嫁が君
風邪の女子寮生お部屋に戻りたくないの



石川 定梶じょう

拡声器

初日さす袋戸棚に引手あり
喪服の身街に来たれば出初式
溶接の窓さし覗き雪女
ポストなど掘りだしてある深雪晴
厳寒の突如もの言ふ拡声器

埼玉 須賀 敏子

一月

竹林に椋鳥の疇や冬満月
白腹のとどまる処冬ぬくし
金柑や鴨にも残す実を選び
あらあらと転び乍らのスキーかな
雪降る日猫の「きなこ」は入院す

東京 田中 藤穂

新年

神田明神人混みを出る大破魔矢
花溢れウイーンニューイヤークンサート
成人式黒地振袖にこやかに
小豆粥忘れて過ぎてしまひけり
雪落とす椎の身震い止まぬ日よ

三重 長崎 桂子

料峭

料峭や帽子にマスク行帰り
料峭の町の夜道の二人連
料峭の屋台の灯聲多し
冴返る星を仰ぎて雨戸引く
余寒なほ癒す食卓なりにけり



鰯とは冬の水から出たやうな 佐藤喜孝

具を増やし息災願ふ雑煮椀 長崎桂子

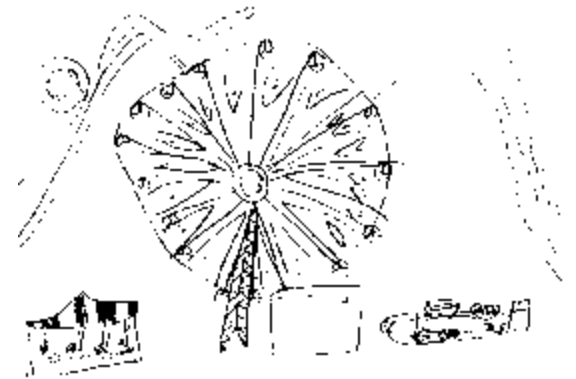
風の街冬三日月の低くあり 森なほ子

一区切りして蕎麦茶飲む小晦日 赤座典子

冬ざれの庭に降りくる雀かな 秋川 泉

御薄色池の回りも紅葉せり 石森理和

寒の水飲むにふさはし江戸切子 大日向幸江



银杏散るベンチの二人スマホ打つ 黒澤佳子

物を捨て肩の荷軽し煤払ひ 七郎衛門吉保

劣化した洗濯バサミ日向ぼこ 篠田純子

年詰まり納豆に発砲スチロール 定梶じょう

千両の実の明かるさや病癒ゆ 須賀敏子

屋久杉の箸のかるさよ鳥雑炊 田中藤穂



鴉の聲しか南京櫨紅葉

佐藤 喜孝

省略の極み。作者は南京櫨の紅葉の見事さだけが言いたかったのでしょうか、俳句なのでそういうわけにもいかず、汐々聴覚として鳥の声を付けたのでしょうか？（なほ子）

淡紅の侘助の花ミルク沸く

田中 藤穂

なんと美しい色彩。白の侘助は純白ではなく、乳白色ですね。一句の中に淡紅とミルク色の二色の侘助が見えるようです。温めたミルクのやさしい匂いがするようです。（なほ子）

伊勢海老の給食歓声の渦

長崎 桂子

伊勢海老は新年の季語なんですね。一月初め

男らの二人一組落葉掃く

森 なほ子

「自然教育園」と題された中の一句。豊かな自然が残る大都市「東京」の中心部にある深緑地。そこに舞い散る落葉は大の男が二人一組での落葉掃きになり、さぞや壮観なものと想像致しました。（泉）

柿ひとつ残りて空の広ざれり

山莊 慶子

たわわに生っていた柿の実。一つ取り残され

た柿の朱と広々とした青空の対比がより際立ち美しい秋の景を感じます。（泉）

帰る日の富士雪化粧終へてをり

赤座 典子

膝手術と題された中の一句。入院された頃はまだ富士山に雪はなかった。それが退院の日は雪化粧。作者も薄化粧され晴れやかな気持ちを重ねたって心浮き立つ感を覚える句です。（泉）

小春日の起き上がりたる野菊かな

秋川 泉

野菊の季節はとつくに過ぎた初冬。地に伏して枯れかかっている野菊ですが、小春日ともなればまた起き上がり、残った花を咲かせています。（なほ子）

感動を抑えて静かに詠んでいます。（なほ子）

手帳から柿のもみぢ葉落ちかかる

石森 理和

紅葉した柿の葉。その美しさに思わず大切に手帳にはさむ。何かの拍子にそれが落ちそうになる。良くある光景ですがその一瞬を捉え柿の葉の鮮やかさが際立ちます。（泉）

スノボーの冬を追い越す速さかな

大日向幸江

面白い句ですね！今しも冬季オリンピックのさなか、この句がよくわかります。時速60キロ以上などときくと、「冬を追い越す」が言い得て妙です！（なほ子）

菊見頃向こう三軒我が庭も

黒澤 佳子

ご近所皆様の庭が菊花で彩られている。そして我が庭も見頃。それぞれの庭の百花競演。良い季節になりましたね。（泉）

妻入院レシ。本買ふ夜寒かな 七郎衛門吉保

奥様が入院された。さて料理のために本をを買う。作者お一人で料理を作っても寒々しい。夜寒かなと云う言葉から悲しい淋しい心持ちを感じます。(泉)

往来にはみ出し花屋シクラメン 篠田 純子

シクラメンがたくさん売り出される季節。花屋からは溢れ出て道までもがシクラメン。こう云う風景ありますね。この句の中に沢山のシクラメンが並び溢れています。

実存といふこと榎植卓に置き 定楳じょう

こつこつして色もさえない榎植の実に、実存という言葉がぴったりくるのはなぜなのでしょう。若き頃、実存主義というものが流行？して

誰か帰るまでは置きっぱなしになります。作者はその重さに友の半年間の苦労を重ねています。(なほ子)



いました。サルトル、ポーボワールの名とともに。作者もお若いころに親しまれたのでしょうか？

卓に置かれた榎植の実に、作者はふとその言葉を思い出されたのです。どなたかの句に、榎植と子規の横顔を取り合わせたものがあり、なるほどと思ったのですが、こちらのほうが哲学的？(なほ子)

受け取りに苦労するほど今年米 須賀 敏子

素直な句でよくわかります。正子さんと添え書きがありますので、お友達に新米を送ってもらったのでしょう。私も親戚から毎年たくさん送ってもらうので、とてもよくわかりますよ。新米の句はもう詠みつくされたと思つていましたが、こういう切り口もあったのですね。私の場合、玄関にどさりと置かれると、お手上げ。

俳句界 2018年4月号

●俳句はなぜ旧飯名なのか？
●俳句で飯名を詠む理由！飯名上の比較喜多明夫 佐々木六寛
●エッセイ「飯名・榎植卓と新米」中本英人 榎本直也 田中真英 穂積誠一 榎植卓著

●新米の句はもう詠みつくされたと思つていましたが、こういう切り口もあったのですね。私の場合、玄関にどさりと置かれると、お手上げ。

●俳句界NOW 白濱一羊
●作例 安原 雅 佐藤貴直美
生漉、吟行を樂しむために
●俳句の歴史を学ぶための必読書
●俳句の歴史を学ぶための必読書
●俳句の歴史を学ぶための必読書
●俳句の歴史を学ぶための必読書
●俳句の歴史を学ぶための必読書

●俳句の歴史を学ぶための必読書
●俳句の歴史を学ぶための必読書
●俳句の歴史を学ぶための必読書
●俳句の歴史を学ぶための必読書
●俳句の歴史を学ぶための必読書

株式会社文学の森 TEL:06-6222-9196 URL: http://www.jungak.com

泥む

暮れ泥む無人の校庭蟬時雨
暮泥む七時の夕餉花石榴
暮れ泥む秋空鴉の影動く
暮れ泥む薄氷に捕まつてゐる藻
暮泥む高速道路冬の靄

芝宮須磨子
赤座 典子
佐藤 恭子
赤座 恭子
赤座 典子

なせる

ナセル湖に水平線や岩燕
なせる

石森 理和

なせる

渦なせる三社祭の人出かな
あめんぼうリンクとなせる手水鉢

鈴木多枝子
長崎 桂子

何故

なぜかしら紫が好き単帯
橋たもと何故かなつかし更衣
豆飯を一人夕食なげ淋し
月見草むかしも今もなぜか裏
梅雨満月地球はまるく何故ならぬ
カサブランカなぜに蝶々避けてゆく
月の波戸何故か片はう靴ありて
鳥兜なぜか恐ろし園の径
神の留守おわんくらげよなぜ光る
黒鮪なぜかわらつて回遊す
桜落葉なぜかゆつくり踏みしめる

須賀 敏子
堀内 一郎
渡邊 友七
渡邊 京子
長崎 桂子
早崎 泰江
定梶じょう
森山のりこ
藤野 寿子
佐藤 喜孝
森山のりこ

朝顔の見事は何故か切なくて
寒梅の香りになぜか狼狽す
無一文で右手ばかりがなぜか冷ゆ
冬の暮何故か鴉の声間のび
名月や災害の加減なぜ出来ぬ

鎌倉喜久恵
鎌倉喜久恵
定梶じょう
早崎 泰江
長崎 桂子

だまし絵の謎解きあかす居待月
謎に満つツタンカーメン神無月

森山のりこ
森山のりこ

なぞる

稲光目でなぞりゆく壁の罅
文字なぞる奥の細道梅雨の入
ベランダの黄砂をなぞる昼下り
東風の匂ふ昔の道をなぞりゆく
白衣の天使と言葉をなぞり夏終る
老鶯や墓誌に彫られし名をなぞる
蜷の道なぞりなぞりて川下へ

篠田 純子
長崎 桂子
赤座 典子
篠田 純子
藤野 寿子
石森 理和
竹内 弘子

鈍

鈍目築ねずみが狙ふサツマキビ
鈍彫りのそそげか髭か青紅葉
これほどに鈍の刃毀れ竹の秋

関口 ゆき
関口 ゆき
篠田 純子
中川 句寿夫

灘

夏灘に出船の声やあさぼらけ
櫓拍子に青藍ふかめ夏の灘

関口 ゆき
関口 ゆき

青柚子の香を添へたるや灘小鯨
坂にきて灘のきらめき冬木の芽
海に出てただ灘かすみ見て立てり
外灘の写真スポット冬の靄

関口 ゆき
渡邊 友七
鎌倉喜久恵
赤座 典子

宥む

居続ける夏風邪宥め旅支度
鶯に居坐りし咳宥めけり

赤座 典子
赤座 典子

那智

皆隠花の長き坂あり那智大社
空梅雨や少し軽げな那智の滝
齧落し水が水追ふ那智の滝
注連縄ゆ現はれ落つる那智の瀧

須賀 敏子
須賀 敏子
須賀 敏子
石森 理和
芝 尚子

懐かし

橋たもと何故かなつかし更衣
君が袖春の野原ぞなつかしき
口窄む味なつかしき夏蜜柑
なつかしきタイヤのチューブ貸浮輪
懐かしき長春の町秋近し
裏返し干す白足袋に母なつかしむ
雷雲の真下の月日なつかしき
落葉焚く匂ひなつかしき寺の町
霜の朝母生国をなつかしむ
玄關を出てなつかしき秋の道

堀内 一郎
芝 尚子
早崎 泰江
石森 理和
王 岩
早崎 泰江
竹内 弘子
芝 尚子
鎌倉喜久恵
佐藤 喜孝

羅や遠目して人なつかしむ
師の庭の実梅取り日を懐かしむ
懐かしきコスモスの道国近し
教材の黴なつかしき柵の奥
物のなき頃の懐かしあけびの実
卒業す骨格模型なつかしみ
紀ノ川と懐かしき名の黒茶柿

田中 藤穂
森山のりこ
王 岩
芝宮須磨子
田中 藤穂
定梶じょう
赤座 典子

なつかしくやすらかさあり蚊遣焚く
なつかしく夜長を子らの服を編む
福は内畳天井なつかしく
いつか死ぬ彼岸の姉をなつかしむ
故郷の冬懐かしく淋しくも
遠き日の父懐かしき熟柿かな
ちぬ釣や夕波なつかしく寄する
遠に聴く訛りなつかし初鴉
懐かしきポスト置く宿春惜む
訃報欄になつかしき人朴の花
鰯雲夕暮に夫懐かしむ

長崎 桂子
長崎 桂子
堀内 一郎
鎌倉喜久恵
山莊 慶子
齊藤 裕子
定梶じょう
佐藤 恭子
石森 理和
田中 藤穂
長崎 桂子

名付け

崖清水命の水と名付けられ
「まさむね」と名付けし猫と日向ぼこ
子雀にマリーと名付け埋葬す

須賀 敏子
齊藤 裕子
大日向幸江
31頁へ



佐藤 喜孝

田中 藤穂

凍雲や今年の一字「北」となる

京都清水寺では毎年漢字一文字を取り上げる。二〇一七は「北」。京都にある日本漢字能力検定協会が「北」が選ばれましたと発表する。それを清水寺の貫主が立てかけた紙に墨書するのをテレビニュースが流す。だからだと墨が流れ落ちる様は余り好きになれない。「北」に決まったのはこの漢字に応募者が多かったからで北朝鮮、九州北部の豪雨などの連想ださうだ。

定規じょう

白きことあへなし尼の干布団

日常「あへなく」は使ってゐたやうでさうでもないやうな気になった。不安になり辞書を。辞書によるといくつかの例が書かれてゐる。その中の「いかんともしがた。しかたがない」がこの句の「あへなし」に相応しく思った。そして詩語として辞書から飛び出して輝いてゐる。何度も読んでゐるとフォーカスが合ったと思つたら、又ぼけたりした奥行きがある不思議な句だ。尼といふ俗に落ちやすい難しいテーマを上質で摩訶不思議な作品にされた。

余談だが父はわたしと同じで浮いた話など顕微鏡で探しても見つからぬ朴念仁であった。葬式を近所の尼寺さんにお願ひしたが葬儀は止めてゐると言はれた。葬儀屋さんのお力添へでなんとか。これが最後と釘を刺されお経を上げていただいた。『暖流』の高橋寿馬子さんの句集にこの時の一句がある。が句集が見つからない。確か十三夜の句であった。お経といひ、俳句といひ、少しは冥土の土産になつたのではとその当時思つたことである。この尼様は小柄で睫毛が印象的な人ですが、掲句の

作者もこの「北」に応募者と同じおもひを持たれたやうだ。季語が重々しく乗つた一句である。

櫨の葉の散りつくしたる昼の月

樹形があらはになつた冬の櫨。落葉樹の冬の幹や枝のシルエットを見るとつい目がいってしまふ。カメラがあればレンズを向けてゐる。同じやうな写真が何枚もハードディスクに納まつてゐる。

その枯木に白い月がかかつてゐる。余計な物を削ぎ落とた清々とした景である。

臘八会われにはまざと開戦日

臘八会とは釈迦が悟りを開いた日。成道会とも。さういふ仏教の話より作者には青春時代、第二次世界大戦の戦火を開いた日として忘れることのできない。このことは同年代の等しくおもふことである。将来のこと、政治を考へる礎である。まざとに作者の強い意志を覚えた。

(以上、二月号分)

尼様はどんな方でしょうか。

かもぬよりしきぬが二日早や古び

「初声」ではないが時の経つことの速さを「二日はやは云ひ得た季語である。あたらしい年を迎へ、はや二日、人もさうだが家も二日分古びた。目に見えぬ俳諧の時計である。鴨居よりも敷居の方が古び方が早いといふ。敷居と鴨居に時の経過を比べると面白。わたしは鴨居の方が早く古びると思ふのだが……。」

日向ぼこ日向ぼこあつ死んでほる

作者には「新蕎麦や外人さんがたべてはる」といふ句がある。方言は句に血が通ふやうだ。この「:はる」は大阪弁だと勝手に思つてゐた。調べたら大阪ではなく京都ださうだ。きつと能登でも使はれてゐるのだらう。どきつとしたが幸せな最後かも知れない。

秋川 泉

老猫も水仙の香に酔うてをり 水仙の香に眠りたる猫と吾

身辺慌ただしく水仙の香がどのやうだったか忘れてゐたことに気がついた。

長い間共に過ごしてきた猫と水仙の花のほとつか、活けられたかは分からないが、ゆつたりと寛ぐ時間、大切なことである。

冬野菜リックに背負ひ家遠し

買はれたか、戴いたか、収穫したかは分からぬがリュックに入れ家路についた。新鮮な野菜の重さに苦勞されてゐる。「リックに背負ひ」のリックが気になった。辞書ではリュック、リックは人名らしい。リュックサック・リュックザック・ザック・ナップザック・背囊などのいひ方があった。

森 なほ子

年の瀬の身の置き処美容院

女性版煤逃げ。女性が綺麗になるのに不満をいふ人はゐない。年の瀬の多忙な日々、美容院はひと落ち着きするところである。ヘアスタイルを調へるのも新年を迎へるための立派な用事。怠けてゐる訳ではありませんよ、

といふところ。男の煤逃げより知能犯。

お降りにほうと息つく五官かな

お降り、「富正月」ともいふおめでたい雨。冬の乾燥した日々以降る雨、ましてやお正月お降りと名前までいただいた雨は「ほうと息つく」感がある。雨の好きな人ならなほ更である。

長崎 桂子

旧正の西の峰峰まだ真白

旧正の昼間の日差しほぐれたり

旧正月のお住まぬのあたりの光景を三句は伝えてくれる。桂子さんとは先年お会ひした。わたしよりはるかにお元気で、四日市より『あを』に投稿されてゐる。四日市は未踏の地だが、車で東名を走ってゐたとき懐かしく思ひつつ通りすぎたことがあった。東京の旧正月はアジアの人でにぎやかになる。四日市辺りはどうだらうかと思ひつつ句を読んだ。

四日市の東は伊勢湾、西は掲句の鈴鹿山脈。その峰峰が旧正月にふさわしく威儀をただしまだ雪化粧をしてゐ

る。「まだ」に本当の春を待つてゐる心持ちである。

今年の陰暦元旦は二月十六日。暖かい旧正月であったやうだ。殊に昼間は心身共にほぐされる暖かさだった。句の「昼間」は少し硬い。「旧正の昼の日差しにほぐれたり」。

旧正や畑に作付の男にっこり

何を作付けするのだらうか。農作業のはじまりは「にっこり」の気分なのであらう。句の調子を整へて「旧正や男にっこり作付けす」。作付けすのところ、季重なりを心配したのかも知れぬが、実際の作物名を入れてもよい。

赤座 典子

淑気かな光る斜面とシユプールと

当然「淑気」も人と時代によりニュアンスが微妙に変化する。

津に浦に富士の淑気のゆきわたる 鷹羽狩行

と並べれば一目瞭然、まさに現代。掲句は広大な雪面とそこに描かれたシユプール。それらが日光に照らされ輝いてゐる。わたしには考へのおよばぬ淑気である。典

子さんには「淑気かな富士にひとすぢ川光る」といふ句がある。光に淑気を感じるやうだ。

雪の花螺髪となりて枝に乗る

前句の大景と違ひ細部を見つめ自然の造化に作者は驚いてゐる。

雪載せて律儀にめぐるリフトかな

人を乗せず代はりに雪だけが乗って黙々と動いてゐるスキーリフト。それをおもしろがってか、時間を持ってあましてか見てゐる作者。一個所で作った三句かと思ふがそれぞれに工夫されてゐる。

七郎衛門吉保

凍空に赤豆ちらすピラカンサ

自然の美しさをあらためて知り素直にそのことを書きとどめる。易しいやうでとても難しいこと。この句は優しい心の俳句。

雑煮とは拘泥続く庭の石

「拘泥続く庭の石」とはどういふ事でしょうか。句会で作者の意図をお聞きしたので「庭の石こだはり続く雑煮餅」では。

黒い雪眠りの醒めし白根山

日本は火山で出来た国土。火山の恩恵を沢山受けてみますが、時々大暴れをする。草津白根山もまだ警戒を解いてはゐません。事柄を確り伝えてゐる句。

篠田 純子

テキスタイルのスーツ手直し春著なる

テキスタイルⅡ（織物・布地・編んだ物）とありましたが、掲句の鑑賞には用をなしません。テキスタイルを織物とか布地とかとはすこし違ふ意味合いに使つてゐる。現代語としての「テキスタイル」を句会の折お聞きませう。ただ、カタカナ語で綴られた春著は春らしい。

介護認定士ケアマネ私女正月

世の中は次々あたらしい職業が生まれてゐる。ちよつと前看護婦さんが死語になつた時違和感をもつたが、今では時代に即応して「看護師」さんでも大丈夫になつた。

丘に立つたことがないので平凡な連想しか持ち合わせがない。掲句の「みな」は風景を楽しむ観光客。充足した時が句中に流れている。

後手のたれかに似をり雪女

雪女天女の裔と言ひ張れり

雪女二句。後ろ手をした雪女がたれかに似てゐるといふのか、後ろ手がたれかににてゐるのか句意に迷つた。若人が後ろ手をしてゐるイメージはない。なぜかいい年になると後ろ手をしてしまふ。掲句の雪女も若くはないのだらう。雪女も現代では長生きらしい。俳句ではさまざまな角度から雪女が詠まれるが、元に戻して本来の雪女を辞書に訪ねた。「雪の精が化したもの。」とある。精ならば対の雪の男がゐないのも頷ける。つづけて「白衣で白い顔した女の妖怪」。幸若に「雪けしからず、ふりつみたれば若雪女といふ物か、荒おそろしや」と怖がつてゐる。近松門左衛門は「花の吹雪の雪女、一念の鬼女となつてあらうらめしや」と。現代の雪女は江戸期の雪女とはDNAが大分変化してゐるやうだ。雪女郎、雪娘、雪の女とも。雪女郎は『腕比べ』に「華魁が雪女郎に化けるてでるか」と。柳樽には「追善が済むとうつつい雪

掲句の介護認定士もケアマネも福祉に関するわたしには耳新しい職業。正確にはその仕事の内容を知らないが身近な者がお世話になつてゐた。句中の「私」も職業婦人である。働かない女性の方が少ないのではないか。たまたまか、仲良しなのか知らないが、時代に活きる女正月の句である。

淑気かなチアガールのバック転

三句ともカタカナが出てくる。綴りも原語で表記する句もある時代だ。赤座典子さんの淑気とは又違ふ感覚の句。純子さんには「淑気かなジョージ・チャキリスの靴の先」といふ句もある。

田中 藤穂

砂丘ゆく歩のみなゆるく冬落暁

「はしたて集」を読むとき心がけてゐることがある。詠まれたときの状況に添う、成り切つて読む訓練である。作品の価値判断を急がぬやうに読むことである。こう書くとき今迄さうしていなかつた事になつてしまふが。

砂丘と聞けば童謡の「月の砂漠」平山郁夫、駱駝と砂

女郎」と。うつつい「は美しいの転。

両句とも作者は雪女を愉しまれてゐる。

須賀 敏子

五日には映画と決めて家を出る

家庭にはその家々のお正月のしきたりが出来る。孫が訪ねて来る日も決まつてくる。なにやかやと家に縛られる。活動的な作者は決然と宣言をして五日に家を出る。映画を観に。敏子さんは句会で「この世界の片隅で」といふアニメを推奨してをられた。出不精なわたしは放映されるのを待つてゐるところだ。録画予約も済ませてゐる。

花の内コーラス終へし友笑顔

友人への挨拶句。友の努力を知つてゐてその結果を喜び、俳句で応へやうとする。悦うれしく思った。「花の内」の花は桜の花ではないやうだ。贈られた花束か？贈答句は季語の比重が増す。季語への気配りを一層こころしなればとおもふ。

クロールや六花烈しく窓を打つ

今では冬でもプールで泳ぐことができる。温水プールの室内と違ひ外はこの日は烈しい雪。この光景を「クロールや」と切り出したところが小気味よい。ただ、烈しい雪を六花といひかへたことに疑問を持った。

石森 和子

初旅や品川過ぎに落ちつくり

冬枯れの車窓が大雪岐阜界限

遠峰や雪原つづく川S字

新幹線は慌ただしい乗物である。東京駅で乗り込み座席番号を歩きながら探し手荷物を整理し、外套を脱ぎホツとすると、もう品川を過ぎてゐた。いつ発車したのかも分からぬ時がある。よいよ初旅のはじまり、はじめりといふ気分やつとなる。

車窓には冬枯の景が後ろへ後ろへ流れてゆく。その景がいつの間にもやら雪景色に変わつてゐる。雪の多いといふ関ヶ原あたりかなと、旅慣れた作者は目的駅の近づいたことを知る。

雪の原がつづく奥は遠くに山が見える。川がくねくね

と雪原を流れてゐる。と、車窓からただ景色を眺めるのではなく一句ものにしやうとする作者がゐる。俳句版鉄道唱歌である。

三句目、「遠峰や川S字に雪の原」にしては。

一月号特別作品「ヴェニスの水すまし」

森 なほ子

羅や「椿姫」観に行くところ

「Tramitalia」樹々奔放に大夏野

老若の肌露はやみな灼けて

伊太利に日傘さしゐて日本人

ボンジョルノ糸のころ草が線路脇

オリイヴの実に手の届きバルコニー

空埋めてマグリットの雲葡萄畑

ゴンドラはヴェニスの水の水すまし

求めたるヴェニスの扇白レース

朝涼やヴェローナの鐘鳴り渡り

ロミオ立ちし中庭狭し葛茂る

ジュリエット立ちし窓辺の夜涼かな

アイーダ哭く野外劇場夏の月 爪伸びて旅の終りや夏深く

旅行吟はある意味で難しい。今回の特作はその難しさを克服してゐる。難しいと云つたのは、作者の見聞が読者に伝へる難しさである。なほ子さんの作品は読者が旅行者になれるやうに詠まれてゐる。楽しめた。



佐藤喜孝著

青宮烏丸

を読む九

佐藤 恭子



広島を爪先きだちて通りすぐ

この句は無季、しかし私には充分季語なきにしても季感が感じられる。広島という若い人達は「サンフレッチェ広島」「広島カープ」または冬に食する牡蠣を一番に頭に思い浮かべる方がほとんどかなと思っっている。

昭和十六年生まれ私にとつて『広島』と言われただけだと、あの昭和二十年理不尽にアメリカによつて落とされた、原子爆弾しか頭に浮かばない。

広島を爪先だちて通りすぐと作者は言っているのだ。何年何十年月日経つても戦後わかつた被害のものすごさがどうしても思われる。その広島の地におり立つたと

きどうしても普通に地面を踏んで歩けない。地底から、亡くなられた方の叫び声が、助けを求める声が、肉親を捜す声が……耳の底からふくれあがつて聞こえる。

そのように感じられる広島に踏みつけるようには歩けない。やはりすこしでも踏まないように力も入れないように足を踏む回数も少なく、早く通り過ぎなければという思いにかられても不思議ではない。

という感じが句に表現された。

『あを』で活躍された栢森定男さんも、降爆直後広島に入つて被爆された。後年それがもとで病にお倒れにされた。誠に残念なことである。

広島や卵食ふとき口ひらく

西東 三鬼

広島之夜遠き声どつと笑ふ

高島 茂

広島石は鬼より赤かりし

それにしても戦争を経験された方の少なくなつてきたこと。私は生まれてすぐなので経験とまではいかないが、いまから思うと両親の苦労は並大抵ではなかつたと思う。特に戦後の大変さは経験できないにしても口で言い表せないほどだと思ふ。あの時のように、いま日本は世界に誇る平和憲法があるにもかかわらず、憲法改正がおおっぴらに言われ出した。なぜだか良く解らない。

「のど元過ぎれば熱さ忘れる」の様に人間所詮あらそいごとが好きなのだろうか。戦争をして何か得になる人が出来るのだろうか。

イラク戦争をみても然り。何の罪もない人々がまず犠牲になつている。こんな不正はあるのだろうか。

私の人生もそろそろタイムリミットが近づいているが、息をしている限り『平和憲法日本』の第9条の改正には反対の意思表示をしていくつもりだ。いまこうして元気に俳句に携わつていられるのも、日本が武力をもつ

て物事を解決しなかつた賜といえよう。

第9条 日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

2 前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

くもり日といふやすらぎに葱の種

今年二〇〇四年、東京ではほとんど梅雨の時期がなかった。五月のこちよい風をうけ、私の体には丁度よい気温を経てさあ夏に行きますよと、準備が出来て夏をむかえるのが例年のしきたりのようなものである。ところがすぐ夏の暑さにうつつてしまうと体の方が順応できずにうろろうろとしました。

六十年も生をうけていて初めて夏に風邪をひいてしまった。夏の風邪ほど困るものはない。暑いので寝相は悪くなる。夜風をいれて寝ると翌朝喉まで痛くなる。クー

ラーをかけて寝ると温度調節が難しくねむりが浅くなってしまう。人間の体は繊細なものだとひとり感心してしまった。

この句は曇っている日は、何故かところが安らぐと
 いている。そういわれてみればお日様がカンカン照り
 つけている時間帯にふと現れた雲にかくれる太陽、暑さ
 に頑張っていた肩や手足もお休みを与えられたようで緊
 張がほぐれる。この句の葱の種の季語はまさしくやすら
 ぎを与える。葱の先にボンボンのようなまるい花がさき
 種ができる。どこにも角ばったところがなく、見ている
 と本当に穏やかな気持ちになれる刻が過ぎてゆく。

夏まけて尻の穴とも掌の卵

先句の感想とだぶつてしまいが本当に暑い。気象観測
 を記録した大正からこんにち迄の最高の気温と東京は
 なつてしまった。39.5度とのこと、夏になると水分
 を多く取るせいか太り気味の躰に輪をかけて例年太つて
 しまう。今年は暑さの方が勝っているのか現状維持が続
 いている。
 夏負けして食欲がおちたときに、つめたく冷やした生

卵をあたたかいご飯にかけて食べるのが食欲増進のきつ
 かけになる。作者は卵で何か料理をしようとしたわけ
 はないだろうから、食べようと思つて手に取つた卵に「お
 や！」この卵の頭は？もしかしたらこっちが尻の穴かな
 と、ふと思つたのだろう。この続きはどんなことを思つ
 たのかつい私も想像をたくましくしてしまつた。
 一瞬思つたことが句となり、それも想像をかきたてた
 ててくれる一句となつた。

面白いものであるし楽しいものだ。(2004.5.6)

カット・赤座吉保



撫で牛 撫で牛に何を願ふや秋日和
 など

著我の花墓参りなど思ひけり
 過労死などあり得ぬ男生ビール
 青稞栗の快感などは言はざりし
 秋うらら死後のことなど言ひ残さず
 小寒や飛行機雲などたなびきて
 蛇口からしばらく湯など夏休
 数の子や輝轍のことなども
 冬ぬくし犬の顔立ちなどほめて
 寝そびれて先のことなど秋の雨
 あさぼらけ廂の古菓など仰ぎ
 ロボット夫春愁などはあり得ない
 土瓶などさびしい時のために買ふ
 朝寝して備忘録など探しをり
 亀のいろ石のいろなど時雨れつつ
 町の銀座春宵流す演歌など
 羽根を突く子などあらねど羽子日和
 忘却などありえぬ戦火五月の夜
 賞味期限切れなどは無しサンドレス
 花見など我関せずや猫昼寝

森山のりこ

鎌倉喜久恵
 篠田 純子
 堀内 一郎
 田中 藤穂
 赤座 典子
 東 亜 未
 佐藤 恭子
 田中 藤穂
 鎌倉喜久恵
 定梶じよう
 篠田 純子
 定梶じよう
 渡邊 友七
 竹内 弘子
 定梶じよう
 鈴木多枝子
 芝宮須磨子
 篠田 純子
 早崎 泰江

19頁より

下見板繕はんなど建国日
 滝などになりたくなかつた条のあり
 茄子など黒く煮られて太宰の忌
 十日町六日町など黄葉晴
 雪女より文あらあらかしこなど
 薄暑掲げる紙に葬儀の日取りなど
 永き日の終活などと軽々し
 春炬燵志貴の歌など眺めぬて
 永き日の終活などと軽々し
 袂などほしくなりたり橋すゞみ
 あなどれぬ枯蠅の目の力
 七(なな)
 薔薇包む七色の紙クリスマス
 寸暇の旅七十路三人七夕夜
 七十を始まりとせり赤まんま
 積雪七センチ自転車はスリッパ
 霜しづく樋に七いろきらめける
 冬波は付かず離れず七曲
 夜行バス七曲りして星近く
 煎餅屋は七つ年上町師走
 初明り七十七歳誕生す
 環七を巻き上げてゆく花の冷

定梶じよう
 篠田 純子
 竹内 弘子
 竹内 弘子
 定梶じよう
 定梶じよう
 大日向幸江
 井上 石動
 大日向幸江
 大日向幸江
 佐藤 喜孝
 竹内 弘子
 芝 尚子
 松本 米子
 芝宮須磨子
 堀内 一郎
 長崎 桂子
 長崎 桂子
 鎌倉喜久恵
 須賀 敏子
 田中 藤穂
 木村茂登子
 篠田 純子

あとがき

『暖流』の後継誌の一誌である『漣』がこの三月号をもって終刊とするとあった。驚くとともに淋しい。発足当時の漣句会に佐藤恭子とともにあそびに行った。横浜といふ遠地に長くは続かなかつた。代はりに現主宰の松林尚志さんの中野の野方の句会にお邪魔させていただいた。まだ山口正三さんも元気でをられた。仕事の都合が付かず野方句会を辞した時、正三さんが誘って下さり寿司屋で飲んで別かれた。などなど漣廃刊と聞き思ひだした。時は移つてゐる。

ただ黙つて坐つてゐても俳句は出来ない。分かつてゐるが日常の些事にかまけて句会当日に慌てふためくことになる。ある人は、月に何回も句会に出かけ、一度出した句は他の句会に出さない、

といふ。又他の人は一日一句作ると決めて実行されてゐる。各自それぞれ工夫されてゐると思ふ。句作りのスイッチをどのやうにして入れてゐるのか句会の折り返し聞いて見やう。

ご芳志多謝

大山夏子 様

(喜孝)

二〇一八年三月号

発行日 三月二十五日

発行所 東京都中野区中央2-50-3

電話 090-9828-4244

ファックス 03-3371-4623

印刷・製本・レイアウト 竹僊房

カット／松村美智子・福井美佐子・ティリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

ゆうちょ銀行(普)(店番018)4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)